

# 鳥居松遺跡 7

Toriimatsu Site 9th excavation report

浜松市教育委員会

2015年8月

Hamamatsu Municipal Board of Education,August,2015



## 例　　言

- 1 本書は静岡県浜松市中区神田町における、鳥居松遺跡の発掘調査にかかわる報告書である。
- 2 発掘調査は保育園舎建設工事に先立ち実施した。発掘調査は、社会福祉法人どれみ会の依頼のもと、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。発掘調査にかかわる費用は全額委託者が負担した。
- 3 鳥居松遺跡における発掘調査は、今回の報告分を9次調査とする。
- 4 調査にかかわる期間は以下の通りである。  
予備調査：2014年11月17日～2014年11月18日  
本発掘調査：2015年1月8日～2015年1月16日  
整理作業：2015年1月19日～2015年8月31日
- 5 現地調査は、鈴木一有・和田達也（浜松市文化財課）が担当し、水島絵理・藤森紀子（浜松市文化財課）の補佐を受けた。整理作業は、和田が担当し、水島の補佐を受けた。本書の執筆・編集、写真撮影は和田が行った。
- 6 調査にかかわる諸記録および出土遺物は浜松市文化財課が保管している。
- 7 本書で用いる方位は真北を示す。標高は海拔高である。
- 8 遺物番号は遺物の種別にかかわりなく、連番を付した。
- 9 本書で報告する土器の痕跡や断面と種別の関係は以下の通りである。  
  
■赤彩　□土師器　■須恵器
- 10 本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。  
(財) 浜松市文化協会→浜文協  
(財) 浜松市文化振興財団→浜文振  
教育委員会→教委

## 目　　次

### 例言

第1章	序　　論	1
第2章	調査成果	8
第3章	総　　括	18

### 図版

# 第1章 序論

## 1 調査にいたる経緯

**鳥居松遺跡の概要** 鳥居松遺跡は浜松市中区森田町・神田町にまたがる弥生時代後期の集落遺跡として1995年に新規登録された遺跡である。これまで度重なる発掘調査が実施されている。弥生時代後期の環濠集落や奈良時代に中心がある自然河川「伊場大溝」などが検出され、弥生時代後期から平安時代を中心とした複合遺跡と判明している。過去の調査により出土した遺物の中には、弥生時代後期の家形土器や、古墳時代後期の金銀装大刀、奈良・平安時代の木簡や墨書き土器、木製祭祀具など、注目できるものが数多く含まれている。

鳥居松遺跡は、周辺に展開する伊場遺跡や九反田遺跡、城山遺跡、梶子遺跡などと一連の様相が明らかになり、伊場遺跡群と総括され、古代敷智郡家の所在地にも比定されている。これまでの発掘調査によって、伊場遺跡群からは地域史のみならず日本列島の弥生時代や古代の歴史を明らかにする上で多くの情報が得られている。

**開発計画の浮上** 2014年、伊場大溝の下流域に相当する地区において社会福祉法人どれみ会から保育園舎建設工事の計画が示された。開発対象地は、鳥居松遺跡2次調査地点の南側に位置し、伊場大溝の流路が存在すると予想された。

2014年11月17日・18日、浜松市教育委員会（浜松市民部文化財課が補助執行）は、開発対象地において調査坑を16箇所に設定し、遺構・遺物の有無や遺構の深さを確認するための予備調査を実施した。

予備調査の結果、開発対象地の大部分に奈良時代を中心とした時期の遺跡が存在することが確認された。とくに、伊場大溝の検出や墨書き土器・木製祭祀具の出土など、対象地が伊場遺跡を中心に展開する敷智郡家の一部であることを示すものが多くみられた。

**本発掘調査の実施** 予備調査の結果を受け、事業者と浜松市教育委員会が事前協議を行い、遺跡の保護が図れない開発対象地東側部分において、本発掘調査を実施することになった。本発掘調査は2015年1月8日から16日にかけて浜松市教育委員会が実施した。調査面積は75m<sup>2</sup>である。



Fig.1 鳥居松遺跡の位置

## 2 調査の方法と経過

**予備調査** 予備調査は、2014年11月17日・18日の2日間にわたり実施した。開発対象地全域に、2m四方の調査坑を15~20m間隔で、16箇所設定した。バックホーで層位毎に掘削を行ったのち、手作業で遺構や遺物の検出と土層の堆積状況の確認を行った。

このうち10箇所の調査坑において、伊場遺跡群を貫いて流れていた埋没河川「伊場大溝」を検出し、そのほかの調査坑では、伊場大溝の南岸が確認された。伊場大溝が、対象地を北東から南西へと貫いて流れていた状況が確認できた。北岸が確認できていないため大溝の幅は明確ではないが、30m以上と想定できる。伊場大溝の埋土中からは、墨書き土器や祭祀に用いられた人面墨書き人形などの木製品をはじめとした豊富な遺物が出土した。

予備調査の結果、対象地は鳥居松遺跡の範囲内であることが判明した。検出された伊場大溝内の遺物量が豊富であり、墨書き土器や木製祭祀具も出土していることから、検出された伊場大溝の岸辺には郡家の関連施設が展開している可能性も想定される。

**本発掘調査** 本発掘調査は、対象地において実施した予備調査によって遺構や遺物が検出され、遺跡の範囲内であると判明した地点のうち、遺跡の保護を図ることが困難な最東部において実施した。2015年1月8日から1月16日にかけて実施し、調査箇所は南北約30m、東西約2.5mの調査区1箇所で、調査面積は75m<sup>2</sup>である。

本発掘調査は、バックホーを用いて層位毎に掘削したのち、遺構・遺物の検出と、土層堆積状況の確認を行った。予備調査の際に確認されていた伊場大溝の南側の肩部を検出し、大溝が流れている方向が明確になった。伊場大溝内から少量ではあるが須恵器や土師器が出土した。また、伊場大溝の南岸では2条の溝を確認でき、南岸上に遺構が広がっていることが確認できた。

なお、伊場大溝の基盤層では液状化現象の痕跡が数多く認められ、平面的には基盤層として認識することが困難で、遺物が出土する部分もあった。本発掘調査では、基盤層であることを確認するため下層を掘り抜き、堆積状況を確認した。

**整理作業** 整理作業は現地調査終了後、2015年8月まで浜松市北区引佐町井伊谷に所在する浜松市埋蔵文化財調査事務所で行った。

---

現地調査参加者 石山勝弘 中村玲子 嶋野洋子

---



Fig.2 予備調査状況



Fig.3 本発掘調査状況

### 3 遺跡をめぐる環境

#### (1) 地理的環境

鳥居松遺跡は浜松市南部地域に広がる平野（浜松市南部平野）に位置する。当地には東西方向に延びる砂丘の高まり（砂堤）が8つあり、砂堤の間には湿地帯（砂堤間低地）が広がっている。それぞれの砂堤上には数多くの遺跡が存在することが知られている。鳥居松遺跡は馬込川が形成した自然堤防上に位置する。弥生時代後期には豊富な出土遺物がみられ、居住城に利用できる安定した状態にあったと捉えられる。

#### (2) 歴史的環境

縄文時代 伊場遺跡群における縄文時代の遺跡は、確認例が少なく不明な点が多い。梶子北遺跡や伊場遺跡などで縄文時代の遺構や遺物が確認でき、縄文時代に人類の活動が及んでいることが認められる。

弥生時代 伊場遺跡群では、弥生時代中期中葉に、梶子遺跡をはじめとした第1砂堤列上に限って集落の展開が認められる。弥生時代後期を迎えると、第2砂堤列上に三重の環濠を持つことで知られる伊場遺跡が出現するなど、集落の範囲拡大が進む。鳥居松遺跡においても、この時期に集落の造営と豊富な出土遺物が確認されている。しかし、古墳時代前期を迎える頃には、伊場遺跡や鳥居松遺跡などは著しく衰退している。



Fig.4 鳥居松遺跡の立地環境

古墳時代 伊場遺跡群における古墳時代前期の様相は梶子遺跡や梶子北遺跡などで確認されている。古墳時代中期後半以降、第2砂堤列とその周辺に広がる微高地の開発が活性化する。鳥居松遺跡でもこの時期に住居跡などの遺構や豊富な出土遺物が確認されている。伊場遺跡群における古墳時代中期後半の集落造営開始とほぼ同時期に、伊場遺跡群を貫くように流れていた埋没河川「伊場大溝」が形成される。伊場大溝の中からは、古墳時代中期の遺物が数多く出土し、渡来系遺物である鋳造鉄斧が出土している。伊場遺跡群における古墳時代中期の集落造営には渡来系の集団が関与していた可能性が高い。鳥居松遺跡では、大溝の中から、朝鮮半島製とみられる金銀装の円頭大刀が出土しており、朝鮮半島もしくは倭王權と関係を持ち、流通を掌った有力者の存在がうかがえる。古墳時代中期以降、伊場遺跡群は急激な成長を遂げ、古代には、敷智郡家が配置された。

奈良・平安時代 伊場遺跡群は、伊場大溝の中から出土した木簡や墨書き器などの文字資料

が充実し、敷智郡家の所在地に比定されている。大溝に沿って倉庫などの郡家関連施設が展開していたといえる。また、周囲には東若林遺跡など郡家周辺に展開した遺跡も数多くみうけられる。伊場遺跡群に展開した郡家に関連する施設は10世紀末を境に急速に衰退し、荘園経営の本格化とともに伊場遺跡群は浜松莊に含まれた。浜松莊の範囲は、西の浜松市西区雄踏町付近から、馬込川西岸に設定されていた敷智郡の東端までと推定される。

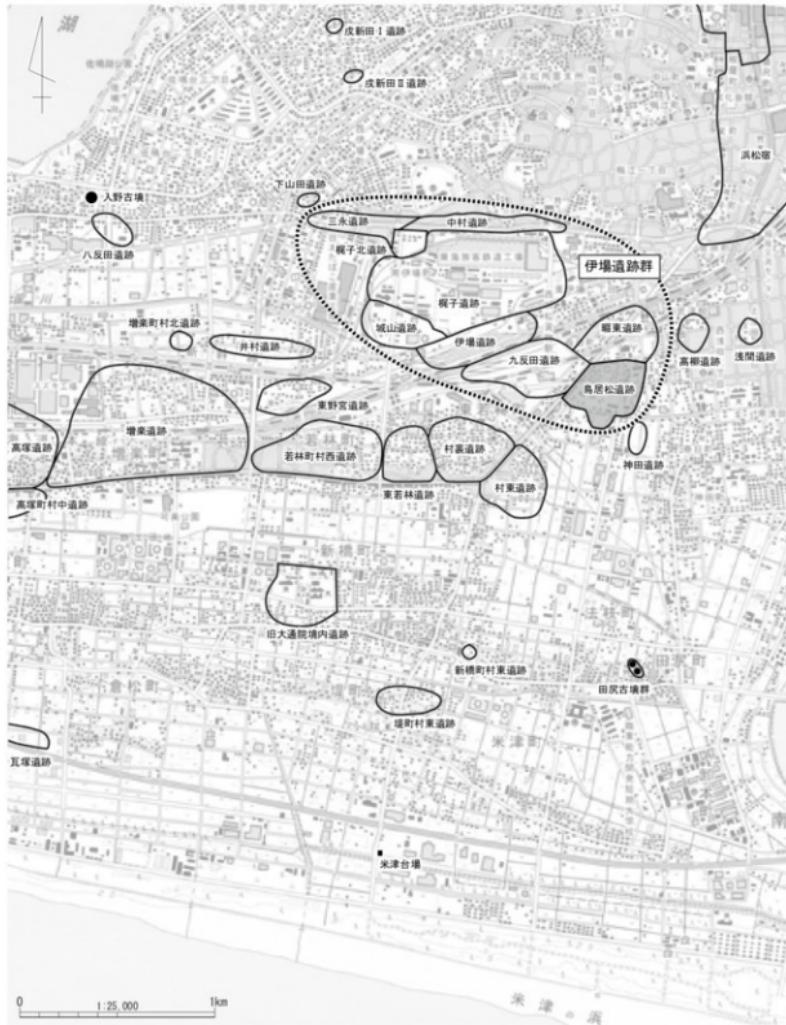


Fig.5 烏居松遺跡とその周辺の遺跡

## 4 烏居松遺跡の調査履歴

鳥居松遺跡では、1996年～2014年の間に計12地点で本発掘調査および試掘確認調査を実施している。これらの発掘調査によって、鳥居松遺跡は弥生時代後期の拠点的集落および、敷智郡家関連施設が展開したと捉えられている。

**1次調査** 1995・1996年、弥生時代後期の環濠を伴う集落と水田が確認された。鳥居松遺跡の造営が山中Ⅱ式期に遡る可能性が指摘された。また、欠山式期の伊場遺跡群の中心が鳥居松遺跡に求められる可能性が示された（浜文協 1997）。

**2次調査** 2000年、弥生時代後期の集落がさらに南側へと広がることが確認された。また、古墳時代後期から奈良時代を中心とした埋没河川「伊場大溝」の最下流部（調査当時）を確認した。

伊場大溝からは墨書き土器が出土し、鳥居松遺跡の一部まで敷智郡家が広がっていることが判明した（浜文協 2000）。

**3次調査** 2002年、弥生時代後期に展開した集落の西端が確認された。集落の西側には水田が広がり、水田の中からは完形の家形土器が出土した。家形土器は、建物部の下部に脚部が取り付けられ、上部には蓋と同様の口縁部をもつ。中央にある建物部は、切妻造りで独立棟持柱も表現されているとみられ、神殿や倉庫をかたどっていると想定される。稻作に関わる祭祀等に用いられたと想定される。また、ヒノキ材を井桁に組んだ枠をもつ奈良時代の井戸が確認された。井戸構造の優位性から郡家に関わる遺構と考えられる（浜文協 2002）。

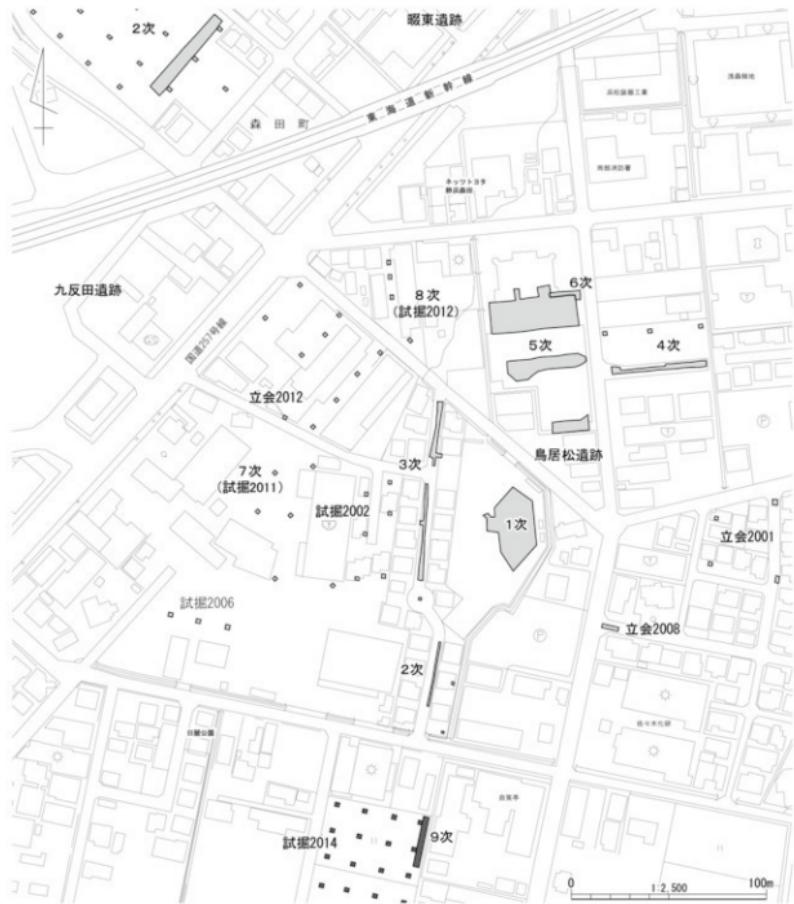
**4次調査** 2003年、弥生時代後期の集落が鳥居松遺跡の北側にも広く展開していることが明らかになった。また、伊場大溝の両岸を検出した。伊場大溝の流路は、鳥居松遺跡4次調査区の上流部にあたる九反田遺跡での伊場大溝検出例や鳥居松遺跡2次調査地点の成果から、伊場大溝が鳥居松遺跡内において東から南北へと大きく流れを変えていることが判明した。伊場大溝内からは、伊場遺跡群各所で確認されている「稻万呂」と記された墨書き土器が出土し、伊場遺跡群と鳥居松遺跡が一連の遺跡であることを改めて印象づけた（浜文協 2003）。

**5次調査** 2008年、弥生時代後期と古墳時代中期から古代にかけて流れていた伊場大溝が確認された。弥生時代後期の鳥居松遺跡は、豊富な土器類や家形土器が出土し、拠点的集落であることが追認された。また、伊場大溝の中からは、古墳時代後期に沈められた装飾大刀や、木簡をはじめとした出土文字資料など豊富な遺物が出土した。木簡には、伊場遺跡群と同一空間にあることを示すものや、郡家が8世紀前葉に貸借や鐵維生産の管理に関わっていたことを示すものがあり注目される。また、伊場遺跡群各所で数点ずつ確認されていた「稻万呂」と記された墨書き土器が11点出土し、鳥居松遺跡が「稻万呂」の本拠地であった可能性が高まった。鳥居松遺跡は、弥生時代後期および古墳時代中期から平安時代にかけて、河川などを通じて外洋と繋がる立地と各地との交流を物語る遺物の出土から、敷智郡家における物資の集散拠点と指摘されている（浜文振 2009）。

**6次調査** 2008年、弥生時代から平安時代にかけての水田跡を検出し、弥生土器や土師器、須恵器、灰釉陶器が出土した（浜文振 2009）。

**7次調査** 2011年、弥生時代後期の遺構および伊場大溝を検出した。また、弥生時代後期・古墳時代後期・奈良時代の遺物が豊富に出土した（浜松市教委 2013）。

**8次調査** 2012年、弥生時代後期の遺構や伊場大溝を確認した。弥生土器や土師器、須恵器が出土した（浜松市教委 2014）。



鳥居松遺跡における発見調査一覧

次 数	調査期間	調査面積	主な時代	特記事項	文 献
1 次	1995.12 ~ 1996.2	700 m <sup>2</sup>	弥生・平安	環濠を確認	(財)浜松市文化協会 1997『鳥居松遺跡』
2 次	2000.4	35 m <sup>2</sup>	弥生・奈良	伊場大溝を確認	(財)浜松市文化協会 2000『鳥居松遺跡2』
3 次	2001.3	16 m <sup>2</sup>	—	遺跡なし	—
4 次	2002.1	172 m <sup>2</sup>	弥生・奈良	家形土器が出土	(財)浜松市文化協会 2002『鳥居松遺跡・3次調査』
5 次	2002.5	24 m <sup>2</sup>	弥生・古墳・奈良	遺物包含層を確認	—
6 次	2003.6	123 m <sup>2</sup>	弥生・奈良	伊場大溝を確認	(財)浜松市文化協会 2003『鳥居松遺跡・4次調査』
7 次	2006.11	12 m <sup>2</sup>	飛鳥・奈良	大型土坑(井戸)を確認	—
8 次	2008.1 ~ 2008.6	1200 m <sup>2</sup>	弥生・古墳・奈良	伊場大溝を確認	(財)浜松市文化振興財團 2009『鳥居松遺跡5次』
9 次	2008.10	41 m <sup>2</sup>	奈良	伊場大溝を確認	—
10 次	2008.12	41 m <sup>2</sup>	弥生	水田跡を確認	(財)浜松市文化振興財團 2009『鳥居松遺跡6次』
11 次	2011.6	60 m <sup>2</sup>	弥生・奈良	伊場大溝を確認	浜松市教育委員会 2013『平成23年度 浜松市文化財調査報告書』
12 次	2012.4	2 m <sup>2</sup>	弥生・奈良	遺物包含層を確認	浜松市教育委員会 2013『平成23年度 浜松市文化財調査報告書』
13 次	2012.8	24 m <sup>2</sup>	弥生・奈良	伊場大溝を確認	浜松市教育委員会 2014『平成24年度 浜松市文化財調査報告書』
14 次	2014.10 ~ 2015.1	148 m <sup>2</sup>	奈良	伊場大溝を確認	浜松市教育委員会 2015『鳥居松遺跡7』(本書)

Fig.6 鳥居松遺跡の調査地点と調査履歴

## 5 伊場大溝の概要

**流 路** 伊場大溝は伊場遺跡群を北西方向から南東方向にかけて流れていた古墳時代中期から古代の自然河川である。流路規模は、延長距離は1.6km、幅は20～30m、深さ2.5mである。1969年の伊場大溝発見から2015年にかけて度重なる発掘調査が行われ、木簡や墨書き器などの文字資料や祭祀跡、渡来系文物などが検出されている。地方における古墳時代から律令期への移行と郡家遺跡の成立・衰退を考えるうえで貴重な情報を多く含んだ重要な遺構である。

**層位名称** 伊場大溝内の層位名称は、伊場遺跡発掘調査時に用いられたものを、その後の発掘調査においても継続的に使用している。伊場大溝の堆積状況は調査地点により差異が認められる部分もあるが、概ね共通している。伊場大溝の層位は大きく9層（I～IX層）に分けられる。

これまでに実施された伊場大溝の調査成果をもとに各層位の特徴を示しておきたい。伊場大溝形成時期を示す最下層はIX層は4世紀代に形成されたとされるが検出された事例が少なく、出土遺物も小片に限られることから不明確な点が多い。VII層は、灰色～緑灰色の砂やシルトを主体としており、5世紀後半を中心とした時期に堆積したとみられる。VII層は青灰色～灰色の粘土や砂を主体とし、6世紀後葉～7世紀代の堆積土である。VI層は伊場遺跡のみで確認された薄い砂層である。VII層とV層を分ける鍵層と認識されたが、他の調査区では確認できず、今のところVII層の最上層と位置づけられている（鈴木敏 1994ほか）。V層は灰色や褐色の粘土を主体とし、所々に砂層がみられる。概ね奈良時代を中心に堆積した層である。IV層は灰色や赤みの強い褐色の粘土を主体とし、砂層は認められない。8世紀後葉～10世紀に堆積したと捉えられる。III層は赤みの強い褐色の粘土で有機質を多量に含んでいる。11世紀～13世紀に堆積したと捉えられる。I・II層は現在まで用いられる水田の床土と表土である。

鳥居松遺跡9次発掘調査で確認できた伊場大溝の層位は、伊場大溝I～V・VII層と共通もしくは類似する特徴が認められることから、伊場遺跡発掘調査時の層位名称を用いる。

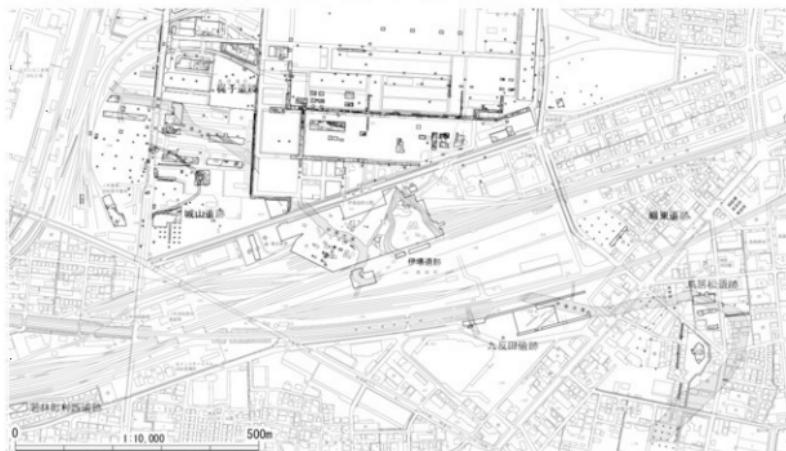


Fig.7 伊場遺跡群と伊場大溝

## 第2章 調査成果

### 1 予備調査の成果

#### (1) 概要

調査対象地に2m四方の調査坑を15~20m間隔で16ヶ所設定し、このうち10箇所で古墳時代から古代にかけての自然河川（SD01：伊場大溝）を検出した。これまでに検出された伊場大溝の中で最も下流にあたる。調査坑9のIV層とV層境界では、木製の祭祀具や墨書き土器、赤彩土師器、土師器の雄形品がまとまって出土した（SX01）。敷智郡家の一部が鳥居松遺跡9次調査地点まで及んでいることが確実となり、敷智郡家の構造と消長をうかがい知る上で重要な成果を得た。

#### (2) 層位

16箇所設定した調査坑のうち10箇所の調査坑において、伊場大溝を検出した。土層の堆積状況は、調査坑ごとに差異が認められるが、概ね以下の通りにまとめることができる。なお、III~IV層は伊場大溝の埋土である。

I層は、表土で水田耕作土の褐色粘土、II層は水田床土と捉えられる灰色粘土である。調査坑13~16ではI層の上に1mほどの盛土がみられる。

III層は、分解が進行していない有機質を多く含む暗褐色粘土である。伊場大溝の外側と捉えられる調査坑8・12~15においても一定の厚さで堆積している状況が認められた。III層堆積時には崖地状に残った伊場大溝の流路跡だけでなく、周辺まで湿地化していたことがうかがえる。主体とした堆積土である。

IV層は、灰色粘土や灰褐色粘土、有機質を多く含む部分がある茶褐色粘土である。

V層は、暗茶褐色粘土や灰褐色粘土、灰色粘土、有機物を多く含む部分がある灰色砂である。この発掘調査においてもっとも遺物の出土量が多い層である。

VII層は調査坑1~6において確認できた。灰褐色粘土や灰色シルト、灰色砂と灰色粘土の互層などの堆積土である。

伊場大溝の基盤層は、底面にみられる灰色粗砂に加え、調査坑7~16で確認できた灰色のシルトや砂を主体とした層があげられる。なお、この基盤層の一部には伊場大溝VII層が含まれている可能性がある。なお、調査対象地の南西側に位置する調査坑14~16では、大溝の基盤層の上位に灰色粘土と黒灰色粘土の互層が堆積している状況を確認した。

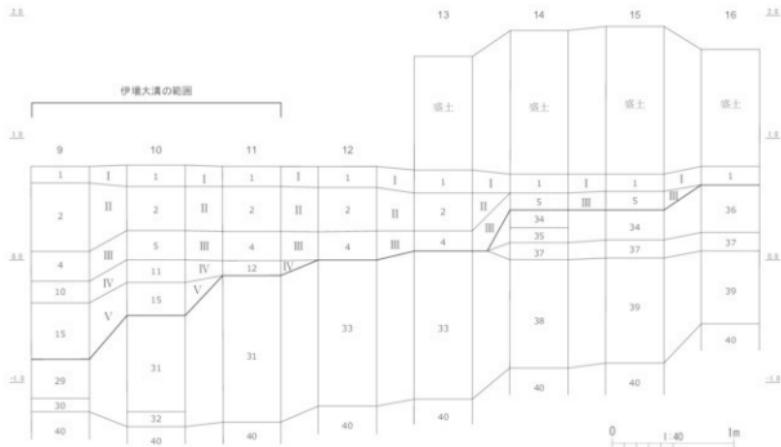
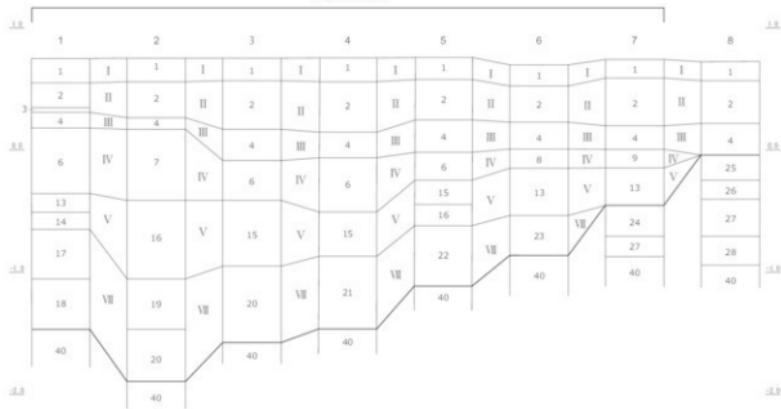
#### (3) 検出遺構

調査坑1~7・9~11において、伊場大溝を検出した。当該地の伊場大溝は幅30m以上と想定できる。検出面からの深さは最深部で2.1mである。最も深い地点を確認できた調査坑2は、河川の底部に近い位置に相当するとみられ、底面の標高値はマイナス1.9mである。この値は、現状で確認されている伊場大溝の川底の標高とも整合的である。伊場大溝内には、分解が進んだ貝が集積し、貝塚の存在が推定できる箇所（調査坑1）や杭や矢板が散乱し護岸施設の存在が確認できる箇所（調査坑9）がある。また、調査坑9では人面墨書きの人形木製品や墨書き土器、土師器の雄形品が集積する箇所があり、何らかの祭祀遺構（SX01）と考えられる。



Fig.8 鳥居松遺跡 9次調査 予備調査区配置図

伊達大溝の範囲



## 土層注記

I 層	IV 層	VII 層	28
1 棕色粘土	6 灰色粘土	17 灰色微砂	29 灰色土
II 层	7 暗灰色粘土	18 棕色粘土	30 棕灰色砂
2 灰色粘土	8 青灰色粘土	19 灰褐色粘土	31 灰色砾砂・粘土互層
3 黑灰色粘土	9 灰褐色粘土	20 青灰色砂・灰色粘土互層	32 灰色粘土
III 层	10 棕色粘土	21 青灰色微砂	33 青灰色微砂・粘土互層
4 暗褐色粘土	11 灰色シルト	22 暗灰色粘土	34 灰色粘土
5 棕色粘土	12 灰褐色粘土	23 黑灰色粘土	35 棕灰色粘土
	V 层	基盤層	36 棕色粘土
	13 暗褐色粘土	24 青灰色粘土・砂瓦層	37 黑灰色粘土
	14 灰褐色粘土	25 灰色粘土	38 青灰色微砂
	15 灰色砂	26 青灰色粘土	39 灰色砾砂
	16 灰色粘土	27 青灰色微砂	40 灰色粗砂

Fig.9 土層柱状図

#### (4) 遺物の出土状況

伊場大溝 II 箇所の調査坑において古墳時代後期から平安時代初期を中心とした時期の遺物（土器・木器）が出土した。出土遺物の大半は、伊場大溝の埋土中から出土したと捉えられる。とくに調査坑 1 と調査坑 9 では豊富な遺物が出土した。調査坑 1 では、伊場大溝IV・V・VII層から豊富な遺物が出土した。IV・V 層からは貝が比較的多く出土する部分があり、近傍に貝塚がある可能性が想定される。

**S X O 1** 調査坑 9 では、伊場大溝IV層と V 層の境界部分を中心に人面墨書き人形や墨書き土器、赤彩土師器、土師器の雛形品などがまとまって出土した。これらの遺物は集中的に出土しており、遺物の構成からも祭祀が執り行われたと捉えられる。

#### (5) 出土遺物

調査坑 1 (Fig.10-1 ~ 19) 調査坑 1 では、III～V・VII層中から豊富な遺物が出土した。1～3 は VII層から出土した須恵器で、1 が高台径 11.2cm の有台坏身、2・3 は甕で口径はそれぞれ、17.6cm と 20.1cm である。4・5・6 は V 層から出土した遺物で、4 は、口径 16.6cm の須恵器摘み蓋、5 は遺存長 26.6cm、幅 2.0cm、厚さ 0.6cm の斎串、6 は残存長 27.4cm の Y 字形木製品（背負子）である。

7～10 は IV 層中から出土した遺物で、7 は口径が 16cm ある土師器塊で内面に赤彩が施されている。内外面ともにミガキがみられ、内面の一部には、他のミガキとは表情の異なる格子状の暗文がみられる。8・9 は須恵器の摘み蓋で口径がそれぞれ 15.7cm と 16.8cm である。10 は須恵器坏身の口縁部で口径は 14.0cm である。調査坑 1 の IV 層中から出土した出土遺物はいずれも VI 期（9 世紀前半）を中心とした時期と捉えられる。

11～19 は III 層中から出土した遺物で、11～14 は土師器である。11 は口径 15cm の全面赤彩された坏で、二次被然を受け、内面にはススが付着している。12 は口径 17.5cm の壺で口縁部の内外面に赤彩が施されている。13・14 は坏形の雛形品でいずれも灰白色である。13 は口径 6.8cm、器高 2.6cm、底径 3.0cm である。14 は口径 6.8cm、器高 2.8cm、4.4cm である。15～19 は須恵器である。15 は口径 16.9cm の摘み蓋である。16 は口径 13.8cm の有台坏身で重ね焼き痕跡から蓋が伴っていたとみられる。17 は高台径 7.6cm の有台坏身である。18 は底径 8.2cm の無台坏身で底部には糸切りの痕跡がみられる。19 は口径 8.4cm の瓶類の口縁部、III 層から出土した遺物はいずれも V～VI 期の遺物と捉えられ、下層もしくは周辺からの混入とみられる。

調査坑 2 (Fig.10-20 ~ 24) 調査坑 2 では、V 層から土師器・須恵器 (20～23)、III 層から木製品 (24) が出土した。20 は土師器の甕、21・22 は雛形品である。23 は須恵器無台塊で口径 12.4cm、器高 4.0cm、底径 7.4cm である。土師器は小片のため、詳細は不明だが、いずれも赤彩が認められる。須恵器無台塊の時期は V 期と捉えられる。また、III 層から下駄 (24) が出土した。

調査坑 5 (Fig.10-25) 調査坑 5 からは、VII 層から口径 30cm の土師器甕 (25) が出土した。

調査坑 9 (Fig.11-26 ~ 48) 調査坑 9 では IV 層と V 層の境界で確認できた SX01 から豊富な遺物が出土した。このうち、時期的な特徴を示すものや特筆すべき遺物を中心として、IV 層から出土した須恵器 1 点と V 層から出土した土師器 9 点、須恵器 10 点（うち墨書き土器 6 点）、木製品 3 点を図示した。26 は内面に赤彩が認められる土師器塊で口径 14.6cm、器高 3.9cm、底径 8.0cm である。27～29 は土師器皿でいずれも全面に赤彩が認められる。27 は口径 9.8cm、器高 1.7cm、底径 9.8cm である。28 は口径 14.8cm、器高 2.2cm、底径 11.8cm である。29 は口径 15.2cm、器高 1.9cm、底径

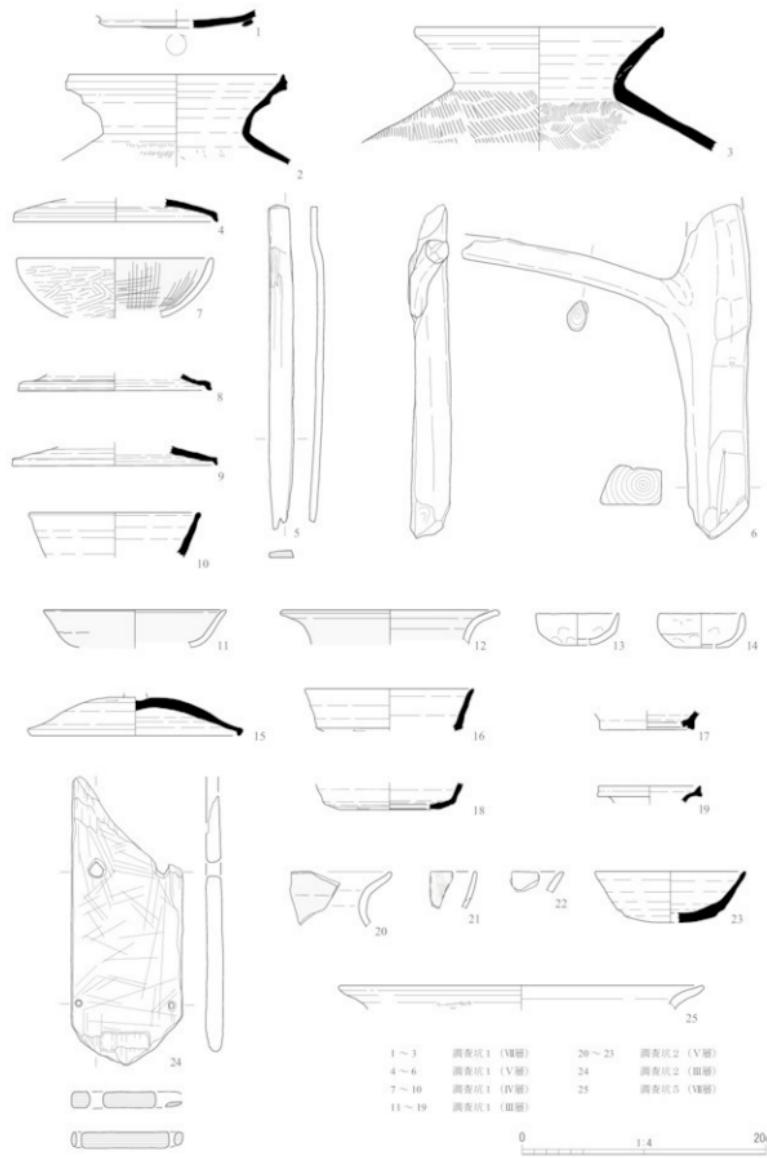


Fig.10 予備調査出土遺物実測図（1）

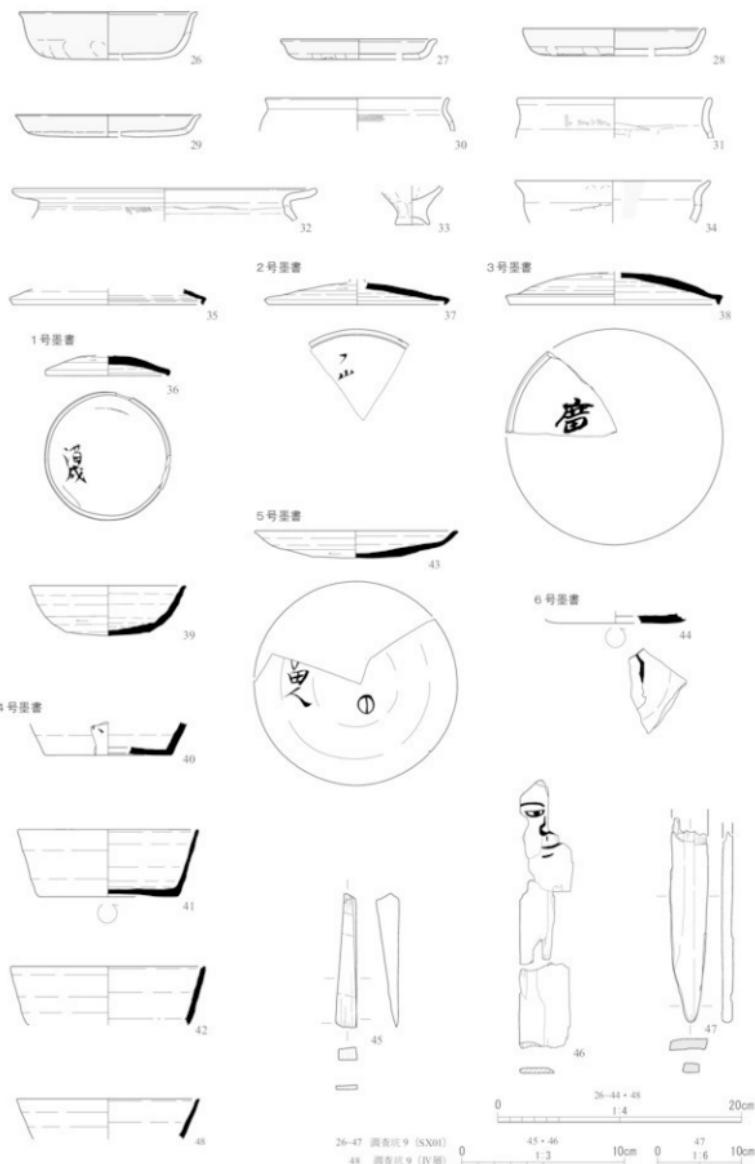


Fig.11 予備調査出土遺物（2）

Tab.1 予備調査成果一覧表

試掘坑	遺構	遺物	遺跡 有無・評価	詳細	出土遺物	
					Fig.	遺物番号
試掘坑1	○	○	○	大溝内(Ⅲ・IV・V層)、近傍に貝殻か、須恵器・土師器・木製品	10	1～19
試掘坑2	○	○	○	大溝内(Ⅲ・IV・V・Ⅵ層)、赤芯部、木製品	10	20～24
試掘坑3	○	△	○	大溝内(Ⅲ・IV・V・Ⅵ層)、須恵器・土師器	—	—
試掘坑4	○	×	○	大溝内(Ⅲ・IV・V・Ⅵ層)、須恵器・土師器	—	—
試掘坑5	○	○	○	大溝内(Ⅲ・IV・V・Ⅵ層)、赤芯部、須恵器・土師器	10	25
試掘坑6	○	○	○	大溝内(Ⅲ・IV・V・Ⅵ層)、赤芯部、木製品	—	—
試掘坑7	○	△	○	大溝内(Ⅲ・IV・V・Ⅵ層)、須恵器・土師器	—	—
試掘坑8	×	△	△	純粋	—	—
試掘坑9	○	○	○	大溝内(Ⅲ・IV・V層)、南斜面付近、須恵器(墨書き器)・土師器・木製品	11	26～48
試掘坑10	○	○	○	大溝内(Ⅲ・IV・V層)、須恵器・土師器	—	—
試掘坑11	○	×	○	大溝内(Ⅲ・IV層)	—	—
試掘坑12	×	×	×	—	—	—
試掘坑13	×	×	×	—	—	—
試掘坑14	×	×	×	—	—	—
試掘坑15	×	×	×	—	—	—
試掘坑16	×	×	×	—	—	—

## 凡例

遺構	遺物	有無・評価
○ 存在(重要)	○ 多数	○ 多量土器・遺構、重要な遺構
○ 存在	○ 存在	△ 少数
× 確認できず	×	△ 少量土器、遺構不明確
		× 遺物・遺構なし

12.0cm である。30・31 は蓋で 30 が口径 14.8cm、31 は口径 15.2cm である。32 は土師器長胴壺の口縁部で、口径 24.6cm である。33・34 は土師器の雑形品である。33 は高环形で、脚径 2.8cm、34 は鉢形で部分的に赤彩がみられ口径は 16cm である。35～38 は須恵器摘み蓋で、35 は口径 15.6cm である。36 は口径 10.0cm で内面に「□成」の墨書がみられる。37 は口径 14.4cm で内面に「□山ヶ」の墨書がみられる。38 は口径 17.4cm で内面に「廣」の墨書がみられる。39 は無台塊で口径 12.7cm、器高 4.1cm である。40 は須恵器箱坏で、底径が 10.6cm あり、外側面に墨書がみられるが欠損部位が多く墨書の内容は不明である。41・42 は箱坏である。41 は口径 14.5cm、器高 5.5cm、底径 11.3cm である。42 は口径 15.8cm である。43 は須恵器無台皿で、口径 16.5cm、器高 2.2cm あり、底部外面には「口田人」と「臼」の墨書がみられる。44 は皿の底部とみられ、外面に墨書が認められるが、墨書の内容は不明である。45 は楔状の木製品である。46 は人面墨書き人形である。眉や目、鼻、口が表現されている。幅や全長は不明だが、厚みは 0.3cm である。47 は先端を尖らせた厚さ 1.3cm の板材で矢板に用いられたと想定できる。調査坑 9 の SX01 から出土した須恵器や土師器の時期は 8 世紀中葉から 9 世紀初頭(V-3～VI-2 期)の間に求められ、木製品も同時期のものと捉えられる。48 は IV 層出土の須恵器坏身で、口径 14.8cm である。特徴から 9 世紀前半(VII-1 期)といえる。

## (6) 小結

調査坑 1～7・9～11において伊場大溝が埋没していることを確認し、当該地は遺跡の範囲内であることが判明した。伊場大溝は下流部においても遺物の包含量が多く、墨書き土器や人面墨書き人形などを用いた律令的な祭儀が執り行われていたことが明らかになった。木簡などの埋没も想定できる。周囲の地形的特徴や遺構の分布状況から総合的に判断すると、当該地は港湾施設(郡津)にも近いと捉えられる。伊場遺跡群(梶子遺跡～伊場遺跡～鳥居松遺跡)に想定できる古代敷智郡家の構造を考える上で、伊場大溝の下流部の流路が確認できた意義は大きい。大溝の周囲には建物などの施設があった可能性があるが、今回の調査では確認できていない。なお、III 層が形成された時期の遺物は極めて少なく、11～13 世紀には全面的に湿地になっていたとみられる。

## 2 本発掘調査の成果

### (1) 概 要

本発掘調査は、予備調査結果をもとに本発掘調査が必要な開発予定地東側の水路に沿った部分で実施した。伊場大溝と2条の小規模な溝を検出した。

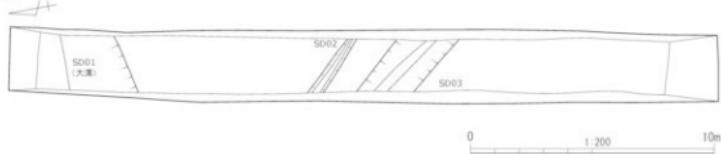
### (2) 層 位

本調査区において確認できた基本層位は、上層から表土（I層：1層）、中世から近代の水田耕作土（II層：2・3層）、有機質の堆積土（III層：4～6層）、伊場大溝の基盤層（19～27層）である。伊場大溝の基盤層では、鎌倉時代以前の地震に起因するとみられる液状化現象の痕跡が認められた。このほか、伊場大溝や溝の遺構埋土が確認できた。

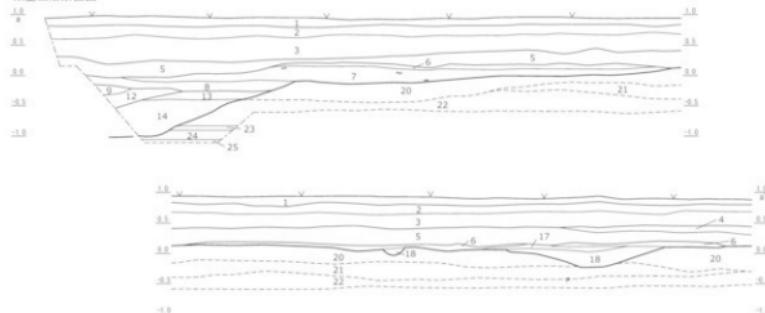


Fig.12 本発掘調査の調査区配置図

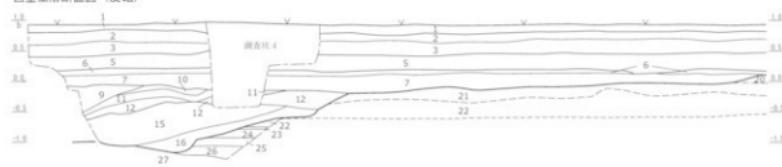
平面図



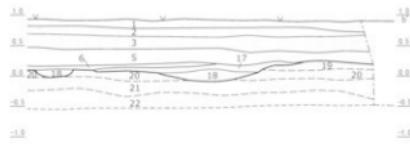
東壁土層断面図



西壁土層断面図（反転）



土層断面図の位置



大塹上位層

- I層  
1 黄褐色粘土（表土、木田）  
II層  
2 墓葬灰褐色粘土（木田冢土）  
3 可塑灰褐色粘土

大塹底土

- Ⅳ層  
4 灰褐色有機質粘土  
5 墓葬灰褐色粘土  
6 青灰色粘土（黑砂を少量含む）

Ⅴ層

- 7 灰色粘土（微砂混じり、遺物含む）  
8 墓葬灰褐色粘土

Ⅸ層

- 9 灰色漂砂  
10 浅黃褐色砂  
11 墓葬灰褐色粘土  
12 灰色粘土  
13 层

Ⅹ層

- 14 灰色粘土  
15 墓葬灰土と青灰砂、浅黄褐色砂の互層  
16 灰色粘土と青灰砂、浅黄褐色砂の互層  
(15に比べ粘土の割合多い)

SD02・03埋土

- 17 反黄色砂  
18 墓葬灰褐色粘土

大塹系基層

- 19 墓葬灰褐色粘土  
20 灰色粘土（青灰色砂）  
21 灰色漂砂  
22 灰色粘土、青灰色砂、浅黄褐色砂の互層  
23 墓葬灰褐色粘土  
24 反黄色砂  
25 墓葬灰褐色粘土  
26 灰色粗砂  
27 砂礫

Fig.13 本発掘調査区の詳細図

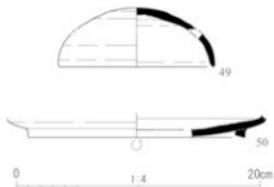


Fig.14 本調査区出土遺物実測図

### (3) 遺構

SD01 伊場大溝は本調査区の北東隅から南西に向かって斜めに検出された。伊場大溝の埋土は、III～V・VII層を確認した。III層（4～6層）は基本層位と認識できるほど広範囲に渡って確認できる。IV層（7・8層）は灰色や暗灰色の粘土である。V層（9～12層）は、灰色系の粘土を主体とし、浅黄橙色砂を一部に含む。VII層（13～16層）は灰色粘土と砂が主体である。

SD02・03 伊場大溝南岸で並行する2条の溝を検出した。埋土（17・18層）の特徴が類似し、同時に埋没したと捉えられ、遺構の埋没時期はIII層堆積以前といえる。

**液状化現象** 伊場大溝基盤層（19～22層）において液状化現象とそれに伴う噴砂を確認した。19～22層は液状化現象が顕著で複雑に砂と粘土が混ざり、遺物も少量含まれている。掘削時には基盤層と認識することが困難であった。噴砂はIII層直下にみられ、13世紀以前の地震に起因していると捉えられる。

### (4) 遺物の出土状況

出土遺物の多くは、大溝埋土から出土したが多くは小片であり、大溝の埋没過程で流れ込んだ遺物と捉えて良い。また、大溝の基盤層（22層）から土師器とみられる小片が出土した。大溝基盤層のうち19～22層は、液状化現象等による混入の可能性を考慮する必要はあるが、伊場大溝の基盤層の形成時期を表す遺物の可能性もある。

### (5) 出土遺物

49は須恵器蓋坏の蓋で口径12.6cm、高さは推定4.8cmである。断面を観察すると、天井部から粘土巻き上げ成形されたと判断できる。胎土は、粘土質で緻密だが、1～2mmの大の小砾を多く含む。断面色調は紫褐色、表面は青灰色で、湖西窯産の製品とは異なる。50は須恵器の有台皿で、高台径17.8cmである。胎土は砂質、色調は灰白色で、製品の特徴からV-3期（8世紀後半）に湖西窯で生産されたとみられる。

### (6) 小 結

伊場大溝を検出し、伊場大溝III～V・VII層を検出した。検出した伊場大溝の南側肩部は急傾斜で落ち込んでおり、V・VII層堆積時には攻撃斜面であったと捉えられる。IV層堆積時の大溝は流れが非常に穏やかであったとみられ、III層堆積時には大溝の流路とその周辺の区別が明確ではなく、湿地が広がっていたと想定できる。また、基盤層には、液状化現象の痕跡がみられ、液状化現象に伴う噴砂の痕跡からIII層堆積開始以前に発生した地震によるものとみられる。本調査区におけるIII層の堆積時期は明言できないが、周辺での調査成果から11～13世紀に堆積したと捉えられ、液状化現象を引き起こした地震の発生時期は13世紀以前とみられる。伊場大溝の基盤層中からも土師器とみられる小片が出土した。液状化現象により混入した可能性と伊場大溝最下流域の大溝基盤層が古墳時代に堆積した可能性が想定できる。今後、伊場大溝最下流域を発掘調査する際には、伊場大溝の基盤層に含まれる遺物に留意する必要がある。

## 第3章 総括

### (1) 調査成果

**検出遺構** 調査対象地を北東から南西へと貫くように伊場大溝（SD01）と2条の溝（SD02・03）を検出した。確認できた伊場大溝の層位は、上位層からⅢ～V層・VII層である。伊場大溝の肩部や岸部を確認できたのは片側に限られるため、川幅の確定はできないものの、30m以上あると想定できる。これまでに発掘調査が行われた伊場大溝の上流部に比べて川幅が広がっていると捉えられる。なお、本発掘調査区において、伊場大溝南肩部分を検出し、流心部分へと急激に落ち込んでいく様子が確認できた。VII層よりV層、V層よりもIV層の方が肩部を外へと移動させていることや出土遺物が少ないことから攻撃斜面であったことがうかがえる。また、III層の堆積がIV層以前の大溝の流路に比べ非常に広範囲に渡って確認でき、III層堆積段階の伊場大溝とその周辺が広範囲に渡り湿地化していたとみられる。これまでに行われた上流部での発掘調査では伊場大溝IV層の堆積範囲を大きく超えてIII層が堆積している状況は確認されておらず、伊場大溝最下流域の環境を示しているとみられる。なお、調査坑16では、III層の堆積がみられず、II層直下に砂と粘土の互層が確認されていることから、調査対象地の南東に微高地が存在する可能性がある。

伊場大溝の中でも岸部に近いと想定される調査坑1ではIV・V・VII層において須恵器や土師器、木製品が豊富に出土した。IV～V層中には貝殻が比較的集中して出土した部分があり、貝塚が形成されていた可能性も指摘できる。同じく伊場大溝の岸部に近いと捉えられる調査坑9では、IV層とV層の境界付近において人面墨書人形や墨書き器、赤彩土師器、土師器の雄形品が集中して出土する地点（SX01）を確認できた。また、矢板状の木製品なども出土しており、護岸施設の存在も想定される。

本調査区では、大溝基盤層に液状化現象やそれに伴う噴砂の痕跡が数多く確認できた。とくに液状化現象の痕跡はFig.13-20～21層で顕著にみられ、平面的には基盤層と認識することが困難なほどで、遺物も含まれた。液状化現象に伴う噴砂とIII層の堆積状況から、液状化現象の起因となった地震の時期は鎌倉時代以前と捉えられる。

**出土遺物** 出土遺物は、伊場大溝の中から数多く確認でき、とくにIV層やV層からの出土量が多い。なかでも人面墨書人形や齋串をはじめとした木製祭祀具の出土や6点の墨書き器の出土が注目できる。このほか、赤彩土師器、土師器の雄形品、須恵器、Y字形木製品など豊富な遺物が出土している。なお、灰釉陶器や中世陶器などは小破片が少量出土したのみであり、9世紀中頃以降、9次調査範囲では、遺跡が衰退していることがうかがえる。

### (2) 特筆される成果

**墨書き器** 伊場遺跡群から出土した墨書き器は1150点以上を数え、今回の発掘調査では伊場大溝中から墨書きが認められる須恵器が6点出土した。墨書き器はすべて調査坑9のIV層とV層の境界付近で検出された遺物集積（SX01）中から出土した。墨書きされた須恵器はいずれも8世紀中頃から9世紀初頭の間に生産されたものと捉えられる。

墨書きされた内容は記載が不鮮明なものや遺存部位が少なく記載内容が不明確なものが多いが、36の「□成」や37の「□山」、38の「廣」、43の「□田人」のように人名や地名などが記載された可能性が指摘できるものが含まれている。

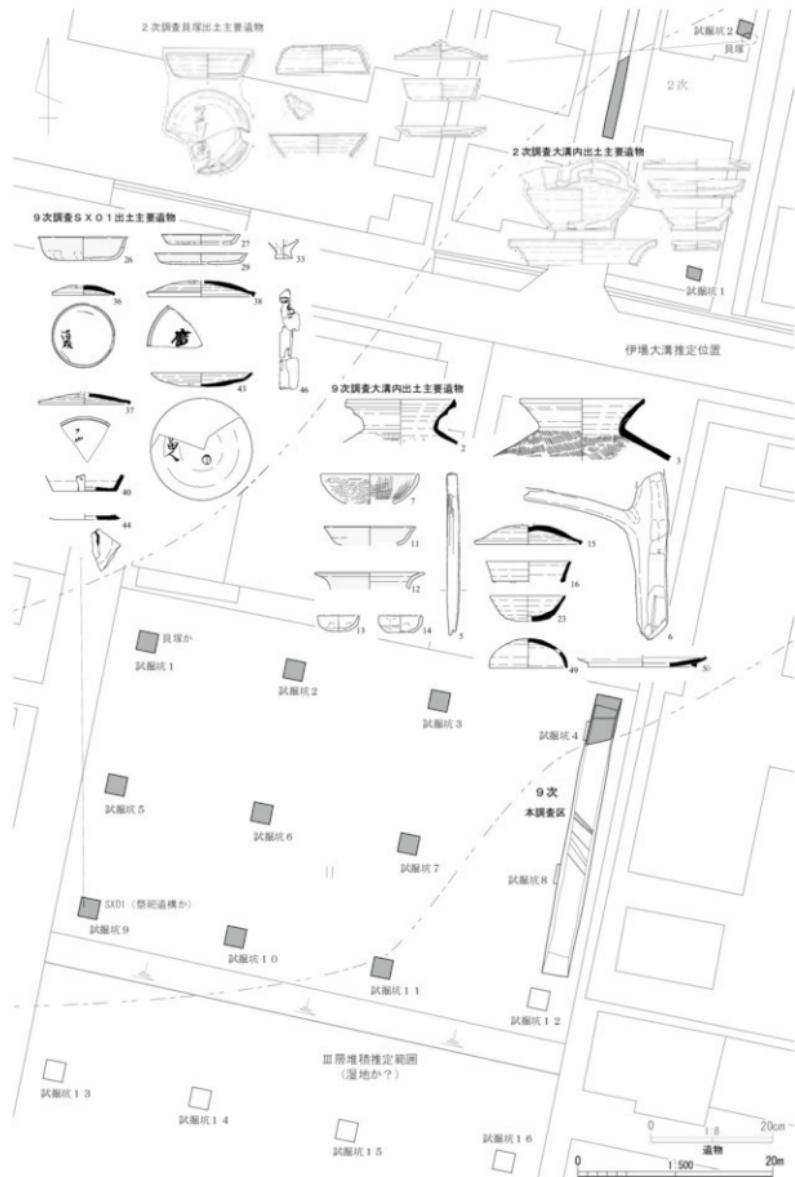


Fig.15 烏居松遺跡9次調査の成果

Tab.2 鳥居松遺跡9次調査出土墨書土器

墨書番号	種図番号	造構	種別	器種	墨書部位	転文	年代級	実年代	产地
1号墨書	Fig.11-36	SX01	須恵器	縹蓋	内面	□成	VI-2	8世紀末葉～9世紀初頭	湖西窯
2号墨書	Fig.11-37	SX01	須恵器	縹蓋	内面	□山	VI	8世紀後葉～9世紀初頭	湖西窯
3号墨書	Fig.11-38	SX01	須恵器	縹蓋	内面	廣々	V-3～VI-1	8世紀中葉～9世紀初頭	湖西窯
4号墨書	Fig.11-40	SX01	須恵器	縹坏	側面(外)	□	VI	8世紀後葉～9世紀初頭	湖西窯
5号墨書	Fig.11-43	SX01	須恵器	無台皿	底(外)	□田人+田	VI	8世紀後葉～9世紀初頭	湖西窯
6号墨書	Fig.11-44	SX01	須恵器	無台皿	底(外)	□	VI	8世紀後葉～9世紀初頭	湖西窯

**木製祭祀具** 今回の調査では、齋串1点と人面墨書人形1点が出土した。今までに伊場遺跡群から出土した人面墨書人形の総数は10点であり、本出土品を合わせると総数11点となった。

今回出土した人面墨書人形は、豊富な須恵器や赤彩土師器、土師器の雑形品、図化に堪えないほど細片だが齋串とみられる木製品、歯骨などとともに調査坑9のSX01から出土した。出土した須恵器は、VI期（8世紀後葉～9世紀初頭）を中心とした時期に生産されたと捉えられる。また、過去に伊場遺跡群から出土した人面墨書人形の特徴と出土層位をみてみると、伊場大溝V層から出土した人面墨書人形に比べて大型であるほか、切り込みによる腕の表現がみられないなど新しい時期の特徴を示しており、伊場大溝IV層出土資料との類似点が指摘できる。V層からIV層の移行期に人面墨書人形を用いた祭儀が執り行われたと捉えられる。

人面墨書人形を用いた祭祀の様子をうかがい知る上で、伊場大溝を200mほど廻った鳥居松遺跡5次調査区で人面墨書人形や齋串を用いた同時期の祭祀の跡が検出されており（5次SX01：浜文振2009）参考になる。いっぽうで、5次SX01から出土した人面墨書人形は、頭部に頭髪もしくは冠が表現されているとみられるが、鳥居松9次調査において出土した人面墨書人形は眉毛よりも上部には何の表現もみられない。

郡家やその周辺施設で執り行われることが多い、木製祭祀具を用いた祭儀の痕跡を伊場大溝最下流部にあたる鳥居松遺跡9次調査地点において確認できた意義は大きい。敷智郡家と深い関わりを持つ人物・集團が当該地に所在した可能性を示しているといえ、敷智郡家の構造をうかがい知ることができる重要な成果といえる。



Fig.16 伊場遺跡群から出土した人面墨書人形

### (3) 敷智郡家と鳥居松遺跡

鳥居松遺跡9次調査により、伊場大溝の下流部分を部分的だが広範囲に調査し、この地区まで敷智郡家に関連した遺物が広がっていることが確認できた。なかでも墨書き土器に加え、群家とその周辺において用いられる木製祭祀具が出土した点が特筆され、伊場大溝南岸に郡家関連施設が存在する可能性も想定できる。伊場遺跡群における敷智郡家関連施設は、伊場大溝上流域の城山遺跡、梶子遺跡、梶子北遺跡、中流域の伊場遺跡、九反田遺跡を経て、下流域の鳥居松遺跡へと広がっていることが確認されている。その範囲は、東西1.0km、南北1.5kmに渡る広大なもので、さらに南北方向へと範囲が拡大することが推測できる。

今回調査を行った鳥居松遺跡9次調査区でも、墨書き土器や木製祭祀具をはじめ豊富な出土遺物が確認できた。伊場大溝と敷智郡家に関わる遺跡は、現在の鳥居松遺跡の範囲よりもさらに南へと続いていることが指摘できる。

伊場遺跡群の諸遺跡の性格についても、検出された遺構や遺物から具体像が示されている。中心施設は上流域の梶子北遺跡・梶子遺跡・城山遺跡を中心とした地区に所在したと捉えられる。中流域に当たる伊場遺跡には文字資料や検出された遺構から「厨」や「駅舎」、「倉庫群」などの存在が指摘されている。伊場遺跡から大溝を下った九反田遺跡では古代瓦が出土しており、郡家周辺寺院の存在がうかがえる。下流域に位置する鳥居松遺跡は、立地から古代東海道と水上交通路の結節点にあるといえる。古地形からは鳥居松遺跡の南に潟湖が展開していたと想定でき、伊場大溝はこの

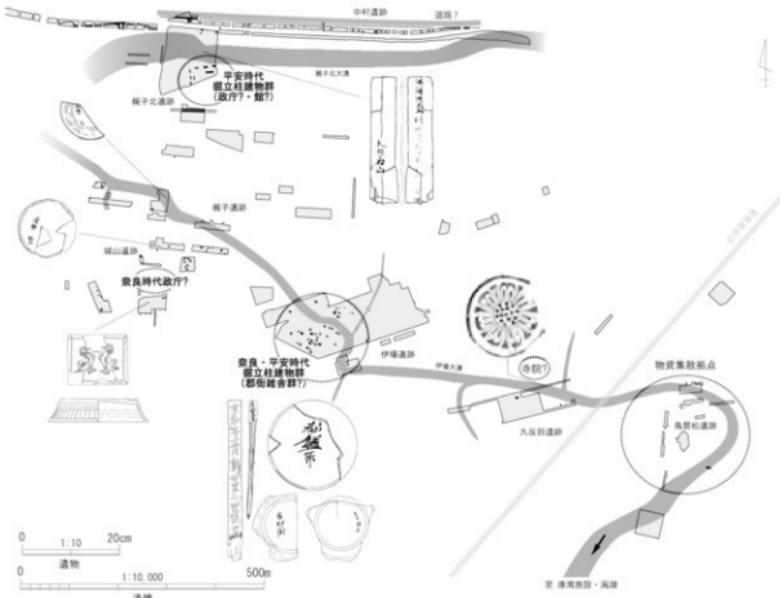


Fig.17 敷智郡家の構造

潟湖に注いでいたとみられる。伊場大溝は水量や規模から、外洋を行き交う大型船が遡上することは困難であったとみられる。河口部にあった港湾施設で小型船に積み替えられ、伊場大溝を使って伊場遺跡群各所へと物資が運搬されたと想定される。また、伊場遺跡群の各所から「稻万呂」と記号が記された墨書き土器の出土が知られている。鳥居松遺跡5次調査ではこの「稻万呂」銘の墨書き土器が11点（可能性があるものを含む）出土し、「稻万呂」銘の墨書き土器を残した人物の拠点が鳥居松遺跡であったと想定される（鈴木一 2009・山本 2009）。鳥居松遺跡の9次調査地点は伊場大溝河口に設けられたであろう港湾施設と物資集散拠点を結ぶ場所で、周辺には郡家と関連を持った人物や施設が存在していたと評価できる。

#### （4）今後の展望

1969年の伊場遺跡発掘調査以降、伊場遺跡群の各所で発掘調査が行われ、敷智郡家の構造が明らかになってきた。なかでも伊場大溝から出土した木簡をはじめとした豊富な文字資料は、日本列島の古代史を考える上でも重要なものが数多くある。敷智郡家へと繋がる発展とその後の衰退は、伊場遺跡群を貫いて流れる伊場大溝の形成と埋没を画期として捉えられる。伊場遺跡群の中心部を貫き流れている伊場大溝は、最上流部と潟湖に繋がる河口部分が不明確であり、敷智郡家の構造を把握する上で、さらなる情報の上積みが期待される。

鳥居松遺跡9次発掘調査では、伊場大溝が確認でき、墨書き土器・木製祭祀具が出土し、伊場大溝最下流部まで敷智郡家関連施設が展開している可能性が高まった。伊場大溝の河口には潟湖の存在が想定され、伊場遺跡群と各地を結んだ港湾施設が、鳥居松遺跡9次調査区のさらに南にあるとみられる。今後の発掘調査により、伊場大溝の最下流域における情報の蓄積や、伊場大溝河口付近に存在が推定される港湾施設の検出を通して、さらなる敷智郡家の構造解明が期待される。

#### 参考・引用文献

- 木下 良 2009『辞典 日本古代の道と駅』吉川弘文館  
鈴木一 2009『鳥居松遺跡における伊場大溝調査の意義』『鳥居松遺跡5次』(財)浜松市文化振興財団  
鈴木一 2013a『7世紀における地域拠点の形成過程－東海地方を中心として－』『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集  
鈴木一 2013b『伊場遺跡群における古代祭祀の変遷』『古代文化』第65巻第3号 (公財)古代学協会  
鈴木敏則 2004『静岡県下の須恵器について』『有志古堂』浜松市教育委員会  
鈴木敏則 2005『第5章 まとめ 第1節 出土須恵器について』『東若林遺跡』  
鈴木敏則 2010『伊場遺跡群と古代敷智郡家』『静岡県考古学研究』第41・42号 静岡県考古学会  
山本 崇 2008『伊場遺跡群出土墨書き土器の再検討』『伊場遺跡総括編』浜松市教育委員会  
山本 崇 2009『鳥居松遺跡出土墨書き土器の概要』『鳥居松遺跡5次』(財)浜松市文化振興財団  
渡辺晃宏 2008『伊場遺跡群出土木簡の再検討』『伊場遺跡総括編』浜松市教育委員会  
可美村教育委員会 1981『城山遺跡発掘調査報告書』  
浜松市教育委員会 1977『伊場遺跡遺構編』伊場遺跡発掘調査報告書 第2冊  
浜松市教育委員会 1978『伊場遺跡遺物編1』伊場遺跡発掘調査報告書 第3冊  
浜松市教育委員会 2007『伊場遺跡補遺編』  
浜松市教育委員会 2008『伊場遺跡群総括編』  
浜松市教育委員会 2015『梶子遺跡21次』  
(財)浜松市文化協会 1993『城山遺跡V』  
(財)浜松市文化協会 1994『梶子遺跡IX』  
(財)浜松市文化協会 1997a『九反田遺跡』  
(財)浜松市文化協会 1997b『城山遺跡VI』  
(財)浜松市文化協会 1998『梶子北遺跡』  
(財)浜松市文化協会 2000『城山遺跡VII』  
(財)浜松市文化振興財団 2012『梶子遺跡13次』

※鳥居松遺跡に関する報告書は、Fig.6に記載

## 報告書抄録

書名（ふりがな）	鳥居松遺跡7（とりいまついせき7）									
編著者名	和田 達也									
編集・発行機関	浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652 浜松市中区元城町103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563									
発行年月日	2015年8月31日									
ふりがな 遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因			
鳥居松遺跡	静岡県 浜松市中区 神田町	22131	01- 04- 28	34 度 41 分 26 秒	137 度 43 分 08 秒	2014年 11月17日 ～ 2014年 11月18日 ～ 2015年 1月6日 ～ 2015年 1月18日	64 m <sup>2</sup>  75 m <sup>2</sup>  延べ139 m <sup>2</sup>	保育園建設 に伴う 緊急発掘		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
鳥居松遺跡	河川跡	古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代	自然河川 (伊場大溝) 溝 祭祀遺構	土師器 須恵器 木製品	伊場大溝の 最下流部を確認					
要約										
鳥居松遺跡は、浜松市中区神田町に所在する遺跡である。推定幅30m以上、深さ2.5m以上の自然河川(伊場大溝)を調査した。墨書き器や木製祭祀具など郡家関連遺跡に特徴的な遺物が豊富に出土し、古代敷智郡家の一部であることが判明した。										

## 鳥居松遺跡7

2015年8月31日

編集・発行機関 浜松市教育委員会

(浜松市市民部文化財課が補助執行)

印 刷 松本印刷 株式会社



伊場大溝 検出状況（北東から）



1 本発掘調査区 西壁土層堆積状況



2 本発掘調査区 東壁土層堆積状況



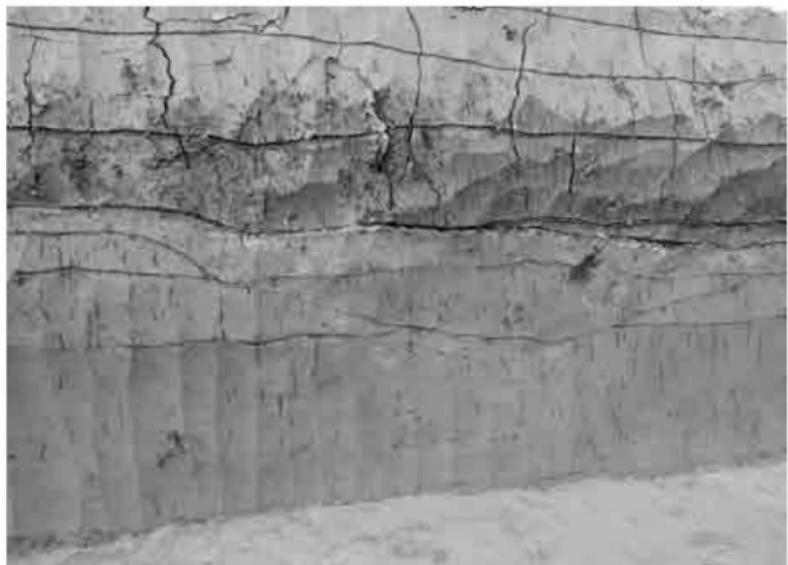
1 本発掘調査区 東壁 伊場大溝土層堆積状況（南西から）



2 本発掘調査区 西壁 伊場大溝検出状況（北東から）



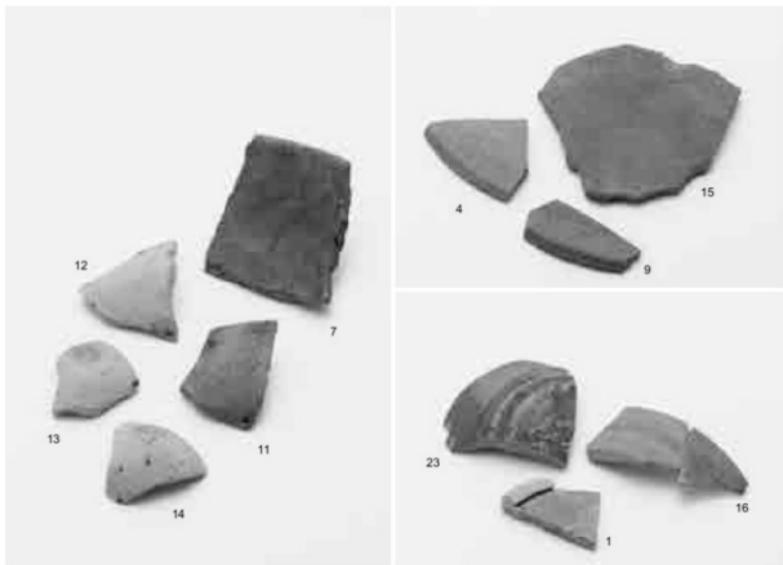
1 本発掘調査区 西壁 伊場大溝最下層検出状況（南東から）



2 本発掘調査区 西壁 SD02 と液状化現象（南東から）



1 調査坑1・2 出土主要遺物



2 調査坑1・2 出土遺物



1 調査坑9 主要出土遺物

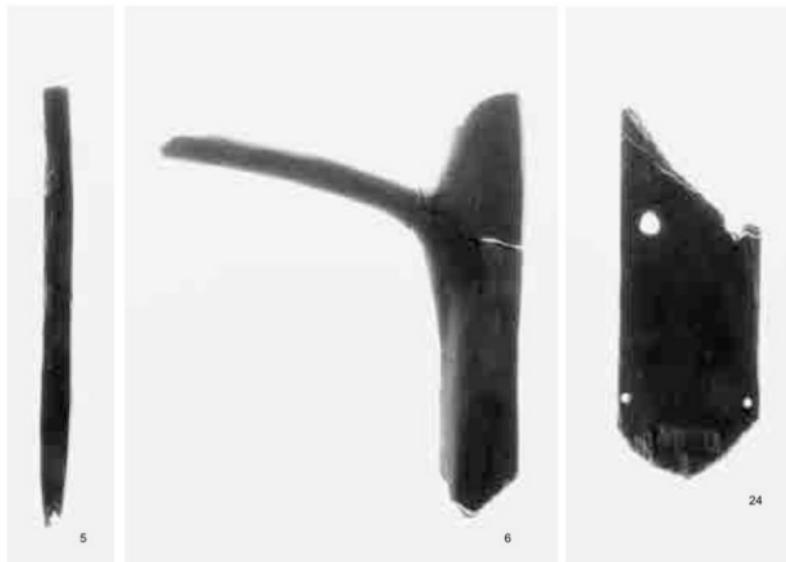


2 調査坑9 SX01 出土遺物



1 墨書土器

2 人面墨書人形



1 出土木製品

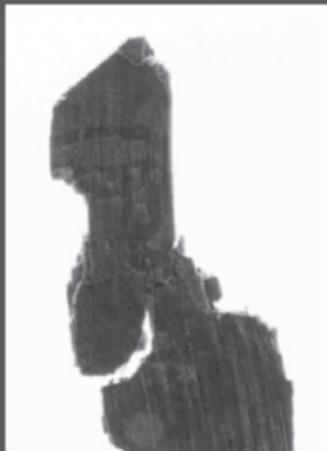


2 本発掘調査区 出土遺物

# Toriimatsu Site 7

## The 9th excavation report

A Report of Archaeological Inverstigation on 5th-10th Century River  
that is called "Iba-ohmizo" in Western Shizuoka Prefecture,Japan



August,2015

Hamamatsu Municipal Board of Education